

キリスト教保育のテキストに見られる乳児保育についての考察

柴田 智世

1. 研究の目的

保育士養成課程の科目として必修である「乳児保育」は、児童福祉施設における3歳未満児の保育について学ぶ科目である。様々な社会状況の変化を踏まえ、『保育所保育指針』、『幼保連携型認定こども園教育・保育要領』、『幼稚園教育要領』が2017年に同時期に改定され、整合性が図られた。

昨今では、0～2歳児を中心とした保育所を利用する子どもが増加しており、家庭においても少子化や保護者の育児に対する不安を受けて、保育所や認定こども園では、子どもや保護者に対し、一層のきめ細やかな対応や配慮が望まれている。

筆者は、「乳児保育Ⅰ・Ⅱ」(1年次前期開講、必修)の科目を担当しており、開講時期を変えて、「保育内容指導法キリスト教保育」(1年次後期開講、選択必修)を担当している。この「保育内容指導法キリスト教保育」では、聖書の視点から保育を見ていくことを基本的な考えとしている。その中で、筆者は「乳児保育Ⅰ・Ⅱ」及び「保育内容指導法キリスト教保育」の両科目担当者としての振り返りを行った際に、保育内容指導法キリスト教保育では、乳児保育や乳児についてはどのように捉え、記述されているのかという疑問をもった。それは、自身がそのような疑問に至るまでは、保育内容指導法キリスト教保育の授業内では、乳児と幼児を特に区別することなく、子どもという一つの枠組みの中で、取り扱っていたという経緯がある。

そこで、キリスト教保育のテキストから、乳児保育や乳児に関する記述を取り上げ、考察を行い、キリスト教保育における乳児保育の捉え方を明らかにしたいと考えた。それによって得た知見を学生への授業に活かしたいと考え、本研究を行うに至った。

2. 研究の方法

『新キリスト教保育指針』及びキリスト教保育のテキストから、乳児保育や乳児について取り扱われ、記述されている箇所を取り上げ、考察する。

3. 結果と考察

1) 『新キリスト教保育指針』 社団法人キリスト教保育連盟、2010年

本書では、「乳児の保育」という項目を立て、6ページにわたって乳児について述べられている。「園は、乳児一人ひとりが尊重され神から与えられた賜物が育まれる豊かな土壌としての役割を果たしたい」¹⁾との冒頭の記述はキリスト教を土台にした子ども観の表れである。

続いて子どもの月齢に区切り、6ヵ月未満児、6ヵ月～1歳3ヵ月未満児、1歳3ヵ月～2歳未満児の3つの発達区分に分けられている。各年齢において、保育者の配慮、保育の内容についての具体的な保育者の配慮が書かれている。ただし、6ヵ月未満児、6ヵ月～1歳3ヵ月未満児については、「保育者の配慮」の項目の中に、保育者の配慮と保育の内容をまとめて記述している。このような発達区分は、当時の『保育所保育指針』(2008年)との整合性をとるためであろう。

また、「保育の内容」として、礼拝、祈り、さんびかが含まれている。これらについては、乳児を対象とする保育にあって、キリスト教の神の存在が感じられる環境が構成されているという意味をもっている。

2) 倉戸直実、渡辺のゆり、児玉衣子、伊藤美佳、荒内直子『最新保育テキストブック1 キリスト教保育』 聖公会出版、2007年

キリスト教保育は、一人の子どもの乳幼児期を通して形成されることが望ましい身体、心情、意欲、態度などについて『幼稚園教育要領』『保育所保育指針』に述べられているところと特に異なるところはないとの記載された上で²⁾ 続いて、キリスト教保育の独自性について言及されている。その独自性とは、私たちの生命への畏敬や互いに認め合う生活を実現することの土台が、キリスト教に基づいていることを宣言し、努力し喜びとしているということである。

乳児保育に特化した箇所では、「0歳～2歳ぐらいまでの子どもたちにとって保育者の影響力は大きい。子どもが、保育者との信頼関係を築く中で、少しずつ同年齢の他の子どもたちそして異年齢の子どもたちへの興味が増して友達といることの楽しさを感じていくのである。」³⁾との箇所から、0歳～2歳が他者との関係性を作っていく際に、保育者との信頼関係の大切さに言及している。その事例として、0歳児のおむつ替えでは、⁴⁾ おむつ替えが単に新しいものと取り換えるという作業ではなく、保育者の優しい言葉がけや、

まなざしが愛の形となって表れている。

また、もう一つの事例では、生後6カ月の乳児(みつるちゃん)の登園のエピソード⁵⁾において、母親と保育者の会話から、この園で保育者が大切にしていることを読み取ることができる。「・・・保育者は時差で出勤してくるため、受け入れ保育者が担任とは限りません。みつるちゃんが安心して保育園で一日を過ごすことができるためには、保護者からの伝言や朝受け入れたときの様子が担任によく分かるように伝えられなければなりません。」との箇所から、乳児とその保護者に対する配慮を読み取ることができる。

3) 高野勝夫、二星啓子『キリストから幼児へ幼児をキリストへ キリスト教保育の理論と実際』ヨルダン社、1995年

本著の冒頭部分である「1 保育とは何か」において、「愛は保育の原点である」とされ、「愛がなければ、無に等しい。・・・愛がなければ、わたしに何の益もない」(第1コリント13章2-3節)と、聖書の言葉が引用されている。続いて、「精神衛生上、乳幼児期には特に愛が必要である。愛が不足したり欠けたりすると、心身の発達に非常に悪い影響を及ぼす・・・」と述べられ、乳幼児期に周りから愛されることの必要性と、該当する聖書箇所を関連付けている⁶⁾。

乳児期については、「生まれて3ヵ月ぐらいまでの乳児は情緒には快不快の二通りしかないが、2才までの間に、これが非常に分化して、5才になると、大人の持っているものと大体同じ情緒を備えたものとなる。」と記述され、乳幼児の心が育まれる上で、情緒面の基礎には愛の体験が必要であると強調されている。

養護についても触れており⁷⁾、養護と教育が一体化して行われることについて、おむつ替えの事例を挙げて説明されている。

次に、キリスト教保育連盟による保育の指針の変遷について書かれている。第1回1965年(昭和40年)『幼児のキリスト教保育指針』、第2回1976年(昭和51年)『続・幼児のキリスト教教育指針』、1989年(平成元年)『キリスト教保育指針』を経て、現在の2010年(平成22年)『新キリスト教保育指針』へと至っている。その中で、これまでは、「幼児のキリスト教保育」とあったものが、ここからは「キリスト教保育」となっている。これまで、幼稚園に重きを置いているという批判のあった連盟の在り方を改め、保育園を含めた乳幼児期全体の保育を考えようとするためである⁸⁾。

続いて、『キリスト教保育指針』(1989)の定義について触れられている。定義は大きく

分けて3つに分類される。

第1に、「子ども観」である。これは、神によって創造された人間であるとされ、その根拠として、旧約聖書の創世記第1章－3章の天地創造の箇所に触れている。人間が神の被造物であるというキリスト教の教えが、子ども観にも表れていると思われる。もうひとつの子ども観は、「神の恵み、すなわちイエス・キリストを通して示される神の愛のもとに育てられる者」ということである⁹⁾。ここで聖書の箇所を引用すると、キリストが幼児を祝福された、マルコによる福音書10章13－16節が当てはまる。幼児がイエスの傍に来ることをイエスの弟子たちが阻んだことに対して、イエスは憤りを見せる。(マルコ10章14節) イエスがこのようにはっきりと憤りを表現したのは、この箇所のみであり、聖書中の他には類を見ないという点は非常に意義深い。これは、当時、子どもたちが大人から大切にされていなかったという社会通念を覆すイエスの言動である。また、この聖書箇所が単に過去の出来事としての理解にとどまらず、現在の保育に当てはめるならば、子どもや保育に関わる大人への教訓とも言えよう。イエスは弟子たちを諫めたのち、子どもたちを抱き上げ(マルコ10章16節)、子ども一人ひとりを温かく祝福した。

さて、マルコによる福音書では、「イエスに触れていただくために、人々が子供たちを連れてきた」(マルコ10章13節)という記述がされ、イエスの元に集まってきた子どもが幼児なのか、乳児も含まれていたのかについては不明である。マタイによる福音書においても「そのとき、イエスに手を置いて祈っていただくために、人々が子供たちを連れて来た。」(マタイ19章13節)との記述があり、幼児なのか乳児も含まれるのかは読み取ることができない。

しかし、ルカによる福音書においては、「イエスに触れていただくために、人々は乳飲み子までも連れて来た。……イエスは乳飲み子たちを呼び寄せて言われた。『子供たちをわたしのところに來させなさい……』」(ルカ18章15－16節)との記述があることから、乳児が含まれていたことが明確である。幼児は歩行が可能であるため、自分の意志によって集まってきたと推測できるが、大人によって連れて来られたであろう乳児に対しても、イエスは同じように祝福したのである。合わせて、当時の時代背景を考えると、子どもたちが愛され大切にされる対象として見られなかった子ども観の時代に、先のようなイエスの態度は人々の価値観を大きく揺さぶるものであった。このようなイエスの子どもへの姿勢は、現在の保育に関わる人々へのモデル的存在とも言えよう。

第2に、「神の呼びかけにたいして責任をもって応答する存在」である。子どもは、

子どもなりに神からの呼びかけ、特にその恵みに対し、繊細に感じ取っている。筆者も、毎週日曜日の教会学校での礼拝で、子どもの純粋な感謝の祈りに触れて感動した経験がある。それは、大人の目から見ると当たり前の、日常的な出来事に対して、子どもは神に感謝の言葉を表していた場面を見たことである。大人には見えないものを、子どもは純粋な観察眼で見ているようにも感じられたものである。

第3に、人格とは主体性と連帯性をもった存在、真の自由と愛に生きる存在であるということである。特に、連帯性に関して、『キリスト教保育指針』では、「共に生きる」という語は全体で17回も使われている。その中で乳児に特化した部分としては、「乳幼児期においては親や保育者を通して神と人への信頼感が養われる。」¹⁰⁾との記述から、身近な大人の援助を介して、子どもは目に見えない神や、周りの人との信頼関係を築いていくことが示されている。

乳児の生活についての記述では、月齢、年齢の区分は1～3ヵ月児、4～8ヵ月児、9～15ヵ月児、1歳児、2歳児の5段階に分けている¹¹⁾。各月齢別、各年齢別に述べた項には、子どもの姿、保育の視点、保育者の留意点が記されている。

4) 『キリスト教保育ハンドブック』一般社団法人キリスト教保育連盟、2003年

本著は保育の専門用語ごとに項目を設定し、それらについての詳細な説明が記述されるという書き方である。

「発達の見方」の項目で、「ある子どもは、十分はいはいしてから歩き出しますが、あまり這わずに歩き出す子どももいます。初めての誕生日を迎えるころに歩き出すのが標準ですが、つかまり立ちすらしない子どももいます。・・・他と比較するのではなく、その子らしい足どりで成長できるように、長い目で見守ることが必要です。」とされ¹²⁾、続いて、「神さまに与えられたかけがえのない今という時を感謝して過ごしましょう。」とまとめられている。保育者から子どもを見ると、無意識に子ども同士を比較してしまうことは日常的である。そして、保育者同士の会話でそれらを言葉にすることもある。それらが全く他意がなく、コミュニケーションのひとつであったとしても、神様が一人ひとりの子どもをそれぞれに価値ある存在として愛していることから考えると、子ども同士の比較への戒めを意味する保育者に対しての警鐘と読み取ることができる。

「生活習慣」の項目では、「生活習慣は、人が健康で快適に、そして周りの人とも楽しく過ごすための生活の基礎といえます。その基礎が、乳幼児期に育まれていくのです。・・・

赤ちゃんはおむつを交換してもらうと、泣きやんで笑顔を見せます。保育者が『気持ちいいね』と笑顔で語りかけながら対応したことで、心地よさを感じていくのです。』¹³⁾の箇所では、基本的な生活習慣を取り上げており、食事、排泄、睡眠、衣服の着脱、清潔は、子どもが健康で快適に、心地よく、そして周りの人とも楽しく過ごすための生活の基礎である。その基礎が、乳幼児期に育まれていると述べられ、おむつ替えを事例に挙げていることは意義深いと思われる。特に、赤ちゃんが不快感を感じて泣き、それに気づいた保育者がおむつを新しく替える際に、「お尻が冷たくて気持ち悪かったね。」「今、きれいにするよ。」「もう大丈夫だね。気持ちよくなったね。」こうした保育者の語りかけに、赤ちゃんは泣き止み、安心した表情を見せる。乳児にとって心地よい感覚を味わい、繰り返されていくことで、子どもは発達の過程を経て自分でもやってみたいという意欲へつながら、自分でできた満足感を味わい自立への意識が芽生えるのである。このように、基本的な生活習慣のスタート地点が乳児期にあることは、大人との応答的な関係が土台にあるということである。

「生活リズム」の項目では、「園では、一人ひとりのリズムの違いを受け入れ、子どもの機嫌や情緒の安定に努め、特に乳児では、個別の対応が柔軟に行われるように配慮したいものです。』¹⁴⁾と、乳児への配慮について述べられている。

「子どものこころ」の項目では、「人は、自分の欲求を自分で満たすことができない状態で誕生し、世話をしてくれる人への依存体験を繰り返しながら、周りの人や世界を信頼できるようになり、自分自身を信じる気持ち（自信）を深めていきます。ですから、小さい子どもの養育に携わる人は、その子の気持ちを受けとめ、できる限り希望をかなえてやるのが大切です。このような中で育つ基本的信頼の上に、好奇心、想像力、創造力、物や人に関わる力などが育っていきます。』¹⁵⁾ここで、小さい子どもというのは、乳児や低年齢児を指すのであろう。

「感性を磨く」の項目では、「乳幼児期は、ことばや知識、生活習慣や文化など、色々なものを吸収していく時期で、周りの世界や大人から受ける影響はとても大きなものといえます。とくに0歳児は、潜在意識にたたみこまれていくものが大事で、それが人間形成の基となります。』¹⁶⁾と、0歳児に特化した記述も見られる。

全体を通しての考察として、本書では、部分的に乳児についてふれているが、キリスト教保育に限定しない一般的な記述の仕方であることが特徴的である。

5) 赤崎ユリ子、尾上明子、茂 純子、松浦八重子『レギーネ・シントラーの希望へと育む～要約と解説～』一誠社、2004年

原著の3章苦しみの箇所では、「子どもたちはいつも喜びにあふれ、気苦労などない存在だと見られていますが、実は、子どもも苦しむのです。苦しみは、誕生の初めから子どもの現存在の一部なのです。」¹⁷⁾とあり、次のような注釈がある。

「私たちの最初の苦しみの体験は、誕生のときだといわれています。それまで安全に安心して過ごしてきた子宮の中から暗い産道を通して全く未知の世界に放り出される。この母親との分離体験は、子どもに「見捨てられた」ような不安感を与えます。子どもはこの不安一ひとりぼっちに苦しみます。すべて人間は、誕生の際、自分の存在のうちにこの苦しみを担うことになります。」¹⁸⁾この部分で、出産時の母親との分離体験によって子どもは見捨てられたような不安感を持ち、ひとりであることに不安をもつという記述の仕方は、著者であるレギーネ・シントラーの想像力のある表現の表れであるように思われる。

さらに子どもの苦しみについて詳細に書かれた箇所では、「離乳のとき、子どもは見捨てられたという経験をします。身体的にも心理的にも、母親と全くひとつであるという今までの経験を、そして食べ物の受容と結びつけて持っている経験、たとえば母の肌に触れながらお乳を飲むという今までもっていた快感を喪失することになります。子どもは苦しみます。その際、言語能力を十分持たない子どもでも、それまでの母親との信頼関係が十分築かれており、身体的にも母親と共にいなくても大丈夫という確信を得ていれば、あまり問題なく母親から離れることができるようになります。このことによって、子どもは最初の社会的業績『放棄すること』を身につけるようになります。」¹⁹⁾と書かれ、「放棄すること」については、次のような注釈がある。

「心から求めるものが与えられないことを知るとき、そのことを受容して、いっそう内面的に充実、成長することを意味します。たとえば、母親との深い信頼関係の中で育まれている子どもに、やがて今までのように母を独り占めすることを放棄(断念)しなければならないときがやってきます。それは離乳のとき、あるいは母の外出で身体的にたえずそばにいたことができなくなる、または弟や妹の出産によって母との時間を彼らと共有しなければならないときです。あるいは、自分の成長を阻むもの、また自分の能力の限界を知るとき、ここまでで断念しなければならないというときもあります。もちろん子どもはそのとき、非常な苦しみや悲しみを体験します。しかし、それまでの親の愛のなかで「受け入れられている」「自分は大丈夫」という気持ち、また信頼感が強く培われていれば、

自然にこのことを受け入れられるようになります。それはやがて自己を肯定する力となり自立へと成長を促します。」²⁰⁾

“苦しみ”という概念は、一般的には乳児がもつものではなく、ある程度成長した子どもがもつと考えがちであるが、本著では「苦しみは、誕生の初めから子どもの現存在の一部」と書かれており、人間の出発点は苦しみから始まっていると言い換えることもできる。また、“放棄”については、子どもの視点で考えるならば、自分の思い通りにならないことや、自分の能力の限界を知るときに、やるせなさや無気力さを味わうことになる。そのような人としての弱さから脱却し、自己を肯定する力へと変えていくためには、自己の努力だけでなく、神様からの助けが必要であるというキリスト教の考え方に繋がると言えるだろう。

4章では子どもと死について取り扱われている。「死は、誕生のときから始まっています。・・・人は最初から、死とともに生きているのです。」とあり、死生観について述べられている。

「幼い子どもたちは、他者に関心をもち、他者に手を差し伸べ、誰にでも抱きかかえられるような、尽きることのない開放性をもっています。それでも最初は、初めての口づけ、撫でられること、互いに寄りそうことが学習され、真似されることから始まります。」²¹⁾これは、キリスト教信徒が隣人愛という言葉で云い表しているすべての行為を、筆者であるレギーネ・シントラーは、開いている目・耳と表現している。これは、幼い者であろうと大人であろうと、年齢に関わらず世代を超えて他者に開かれた目であり耳であることを意味する。つまり、乳児が誰に対しても受け入れ、また受け入れられようとする姿は、将来的に、自分と近い人への愛から遠い人への愛へ、そして見知らぬ人に対しても開かれていくことになるということである。

「どのように神を伝えるのか」²²⁾のところでは、「まず根源的なことは、人間の間において、そしていろいろな美のある世界において、原初的な安心感を育むことです。胎児の時から育まれた、あの母のふところに抱かれているときの絶対の安心感、自分が一人格をもつ者として受容され愛されているのだという確信です。これは宗教的成長にとって重要な土台となります。」と続いている。大人が子どもに神様のことを話す際に、胎児の時に母に抱かれているときと同じ安心感が必要であるという視点は、独特な表現である。なぜなら、保育者は子どもの前で話をする際、話の内容や、方法・手段に意識が向きがちである。また、クラス集団の中での聖話は、大人数での子どもたちを前にして、常に保育者は心穏や

かに神様の話を語ることができるとは限らない。そのような状況の中で、原初的な安心感について述べられているのである。これは、保育者の心の在り方や神様に向かう姿勢を問われていると思われる。

最後に本著は、乳児について特化された項目は見られない。子どもという記述の中に、乳幼児が包括される書き方である。

4. まとめと今後の課題

『新キリスト教保育指針』は、キリスト教保育を行う園の基本的な役割を果たしていることから、乳児の保育に対する在り方が整理されていると思われる。

そのほかのテキスト4冊については、乳児保育という独立した項目がある、ないにかかわらず、全ての著書において乳児について扱われている記述がある。しかし、それらの取り扱いや記載内容については、各テキストによって重点を置く度合いに差があることも分かった。そのため、キリスト教保育のテキストとして、教員側の選択や判断が影響をもつと思われる。また、学生が乳児保育の授業内で学んだ考え方や、習得する知識、保育用語をもとにして、保育内容指導法キリスト教保育の授業で関連付け、より深めていくことにより、系統的に学ぶことができると考えられる。

今後は、保育内容指導法キリスト教保育の授業内で、学生が乳児をどのように意識し、保育に活かしていくのかについて実践的な取り組みを行い、授業内容の事例を提示したいと考えている。

<引用文献>

- 1) 『新キリスト教保育指針』 社団法人キリスト教保育連盟、(p. 53) 2010年
- 2) 倉戸直実、渡辺のゆり、児玉衣子、伊藤美佳、荒内直子 『最新保育テキストブック 1 キリスト教保育』 聖公会出版、(p. 185) 2007年
- 3) 同上、(p. 148)
- 4) 同上、(p. 111)
- 5) 同上、(p. 9)
- 6) 高野勝夫、二星啓子 『キリストから幼児へ幼児をキリストへ キリスト教保育の理論と実際』 ヨルダン社、(p. 13) 1995年
- 7) 同上、(p. 14)

- 8) 同上、(p. 29)
- 9) 同上、(p. 40)
- 10) 同上、(p. 42)
- 11) 同上、(p. 50)
- 12) 『キリスト教保育ハンドブック』一般社団法人キリスト教保育連盟、(p. 29) 2003年
- 13) 同上、(p. 33)
- 14) 同上、(p. 34)
- 15) 同上、(p. 36)
- 16) 同上、(p. 57)
- 17) 赤崎ユリ子、尾上明子、茂 純子、松浦八重子『レギーネ・シントラーの希望へと育む～要約と解説～』一誠社、(p. 35) 2004年
- 18) (p. 40)
- 19) (p. 36)
- 20) (p. 41)
- 21) (p. 59)
- 22) (p. 98)

<参考文献>

- ・『平成 29 年告示幼稚園教育要領 保育所保育指針 幼保連携型認定こども園教育・保育要領<原本>』チャイルド本社、2017年
- ・加藤善治、茂 純子『レギーネ・シントラー希望への教育 子どもとキリスト教』日本基督教団出版局、1992年
- ・高野勝夫『キリスト教保育への関わり方（キリスト教保育と保育者の信仰問題と関連して）』神戸キリスト教書店、1991年
- ・新井 智、一色義子ほか『イエスさまを語る 12 か月（第 4 集）キリスト教保育連盟、1989年
- ・太田知恵子『子供たちの明日』教会新報社、1978年
- ・青木道代、伊藤雅子ほか『イエスさまを語る 12 か月（第 2 集）』キリスト教保育連盟、1977年

An Analysis of Infant Childcare Textbooks Focusing on Christianity Childcare and Education

Shibata, Tomoyo*

本稿では、キリスト教保育のテキストから、乳児保育や乳児に関する記述を取り上げ、考察を行うことにより、キリスト教保育における乳児保育の捉え方を明らかにした。その結果、それらの取り扱いや記載内容については、各テキストによって重点的に記述されている度合いに差があることが分かった。

そのため、キリスト教保育の授業のテキストを選択する際は、教員側が授業内で特に重点的に扱いたいことが、テキスト選択の判断基準となることは言うまでもない。また、学生が乳児保育の授業内で学んだ考え方や、すでに習得された知識、保育用語を基礎として、キリスト教保育の授業で関連付け、より深めていくことにより、両科目を系統的に学ぶことができると考えられる。今後は、保育内容指導法キリスト教保育の授業内で、学生が乳児をどのように意識し、保育に活かしていくのかについて実践的な取り組みを行い、授業内容の事例を提示したいと考えている。

キーワード：キリスト教保育, 乳児保育

